

世帯と人口

(平成4年12月1日)

世帯 37,487 (+83)

人口 109,735人 (+114)

男 56,660人 女 53,075人

広報 えびな

編集・発行
海老名市役所広報広聴課
〒243-04
神奈川県海老名市勝瀬175
☎(0462) 31・2111

今年(酉年)

入れ葉で決まった鳥の代表

昔、鳥たちが十二支に誰を代
表に選ぶかを協議した。最初に
ワシが
「百鳥の王である自分が代
表になる」
と言ったので、みんな口をつ
ぐんでしまった。ワシが天帝に、
「鳥類の王であるから、自分
が十二支に入ります。反対の声
はありません」
と報告したが、天帝は、
「王とは、その徳を慕う者た
ちが敬い尊ぶ言葉で、自分から
言い出すとは思いません。上りであ
る。反対の声がなかったのはそ
の鋭いくちばしと爪が恐ろしい
からで、反対がないのは畏成で
あると決めたかかえるのは強者の
独断である」
と、お許しにならず、改めて
鳥たちに、入れ葉の選挙によつ
て代表を選ばすように言い渡され
た。
立候補したツルは、めでたい
鳥としての立場を格調高く力説
し、オウムは巧みな擬声で教養

の低いことを並べたて、フクロ
ウは夜間行動のできるの自分
だけである、くちばしを繰り返
返し、着飾って出てきたクシャ
クは、鳥の仲間として、番美しい
は自分である、と羽根をいっば
いに広げて見せたが、後ろは
尻が丸見えだったので、みんな
苦笑した。
カラスは木のてべんで、世
の中怖いものはない。人間を
「アホウ」と笑えるのは自分だ
けた、と下品にがなりたてた。
このときは、
「愚か者と鳥は高い所が好き
だ」と、やじがとんだ。
小鳥たちはいずれも可憐な姿
で、美しい声とその魅力を用を
からして訴え、みなそれぞれに
鳥の代表にふさわしいことを強
調したが、ニワトリだけはおさ
れて壇上に立つと、よろしくお
願ひいたしますと言っただけで
壇を下りてしまったが、このと
き、

「頼むぞー」
という声があがった。
天帝のお指図で、各自の前に
ある箱に木の葉を一枚ずつ入れ
た結果、仲間をえしきにするワ
シには一枚も入らず、定住地も
ないのに見栄を張る気取り屋の
ツルにも、人真似をして物知り
ぶるオウムにも、美しいだけが
取り柄のクシャクにも、明るい
所では生活できない二重性格の
フクロウにも、ころつきよう
なカラスにも、声自慢だけに終
始した小鳥たちにも葉は集まら
なかったが、ふだんあまり自立
せず、よけいなことをしゃべら
ないニワトリの箱には、入り切
れないほどの葉が集まったの
で、鳥たちの代表として十二支
に加わることになった。
誠実で生活にけじめのあるニ
ワトリが、仲間のためにも世の
ためにも一番役に立つことを、
みんな知っていたのだ。

この話は、小島直司さ
んからお伺いしました。



フォトピックス

直売所で販売、五月にはイチゴの摘み取り観光農園もお目見得する。

農家では、朝三時から七時ごろまでイチゴ摘みに追われているが、今年のイチゴは甘くて、つよも例年並みとのこととおおいに期待できそう

安心して新年を

老人家庭の安全点検
市内に住む六十五歳以上のひとり暮らし老人家庭の安全点検



消火器の使い方をお年寄りにおおむね好評だった。点検を見守るお年寄りからは「安心して新年を迎えられませう」という声が多く聞かれた。

が、十二月四日から四日まで、七日から九日までの六日間に行われた。

この点検は、ひとり暮らしのお年寄りが、安心して新年を迎えられるよう

仲良くもちつき

市わかば会館で



今年のイチゴも甘い(尾上高穂さんのハウスで)

えられるように、十年前から行っているもので、今回は二百一世帯の家庭を点検した。

市職員、市消防署員、東京電力厚木営業所員がチームを組み、暖房器具、ブレーカー、配線などをチェックしたが、

十二月十日、大谷中学校の生徒とPTAの役員が、わかば会館を訪れ、わかば作業所の人たちと一緒に、もちつき大会を行いました。

同校では、生徒とPTAが協力し、学校近くの水田を借りて、毎年、稲作つくりを続けているが、この日使われたもち米三十が、その収穫の一部を持ち寄ったもの。

交替で杵を振り上げ、ついたもち約百食分。さつそうきなもちあんでつけて食べたが、あつという間にたいたらけつしまい、みんな楽しかった。もちも食べられちゃう」という声も聞かれた。

天平の夢再び

海老名中央公園に、観光センター「ボルネオメント」七重の塔

完成し、十二月十九日竣工式が行われた。

相模国分寺にあったとされる七重の塔を模倣したこの観光センター「ボルネオメント」は、海老名市を訪れる多くの人に、その歴史と文化を知ってもらおうと市



夜間照明を点灯した七重の塔

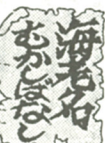
観光協会が建設したもので、大きさは実物の約三分の一で、高さ約二十二メートル。海老名駅東口を出ると、その優雅な姿を望むことができる。

一月十五日までは中央公園全体を会場に、恒例のウインターイルミネーションが開催されているが、今年はこの七重の塔も加わり、例年以上にファンタジックな夜の演出となっている。



みんなで力を合わせてついたおもちはおいしい

第293話



海水余話 その1 防水対策 あれこれ

海老名では、昔から相模川の海老段丘上の村々を「上地」、相模川の氾濫原にある村々を「下地」と地形上から呼んでいた。

その上地には、「下地の上郷には嫁に行くな」という言葉があった。これは江戸時代重税や助郷役に加えて護岸や堤防の普請があり、ときには大水にも見舞われて生活が厳しい土地だから、という意味を含んでいた。しかし、これは上郷だけの問題ではなく、村々にも共通する言葉でもあった。



この溝に堰板をはめ込んで大水を防いだ

と、地元の古者はいう。それは、ほとんど沿岸沿いに植えておいたそう。

上郷では「松楸」といって、毎年春になるとこの作業をした。やがて、その松に大水が残っていたところから溜まって腐ると、そこを開墾した。河原は昔からの住民八十六戸の共有地であったから、この畑は八十六戸で分け合った。

封建時代の領主は、堤防普請の認許はするが、後はすべて農民の負担にした。江戸初期の領主大和和広の広のよう、治水事業を積極的に行った領主は例外だった。それよりも農民は大水の被害から逃れるため、毎年農閑期になると、せつせとバイスケ(注)や、もっこを持って土を運び、土手を積み修復工事をするようになった。

だが、近代になると様相は変わってきた。関東大地震で崩壊した河原口の堤防は、果費をもつて翌年に復旧し、上郷と昭和三十二年ころには上郷の堤防にも補強の手が延びた。昭和六、七年ころの農村不況時には、失業救済事業の一環として果が堤防工事を行った。この時期、門沢橋では、果予算の不足分を地区で負担して完成を期したという。

堤防を道路が横切る所は、大水の際そこへ土俵を積み

海老名むかしむかし

電話で海老名の昔ばなしが聞けます。

12月25日～1月8日 第128話 櫻礼

1月9日～1月18日 第129話 春を運んできた遊芸人

333・3838

池田 武治